

きざしおぼやかし

NO36 月刊

第七号 人物篇 第七号

昭和廿六年六月一日 発行 (非売品)

発行所 岡山県都窪郡吉備町庭瀬七〇七 宇垣方

吉備 観 光 協 会

藤原大納言成親卿 (終焉の地)

成親卿は大貳符録足公の後裔である河辺左大臣魚名の十代太宰大貳頭季の孫に当る中納言家成卿の子にして名門の出である。(大納言の傳説は約九百八百年に於て千六百石である) 夫つて後白河法皇(二二〇一—二二九二)の寵愛を受けていた。偶近衛大将に補缺がありこれに就任せんとした女、当時朝野に権勢を振舞つた法つて成親は清盛を恨むようになつた。平家の驕横を憤懣に思つていた法勝寺執行俊寛、西光法師、近江中將入道蓮淨、山城守基兼、式部大輔雅綱、手判官康頼、多田蔵人行綱等の一味は治承元年(一一七二)の春三月松花の味を乱れり大文字山の京洛南禁の藤ヶ谷に於る俊寛の山荘に会合して手家覆滅の密議を行はれ、盛んな河盛りの宴は夜遅くまでたけなはに繰りけられた。酔ひつぶれて我家に帰つてきた多田蔵人行綱は床についたがこの謀議が察覺して清盛に捕へられ監禁拷問に處せられた悪夢にうなされ俄かに心が乱れ、この露頭を虞ルて態々福原の藤田の決にある別邸に清盛を訪れ一歩始終を密告したので、他の人たちは一網打盡に捕へられた。それも別個に呼ば出されたので察覺したのではな、女と河豚を食つた気持で出頭したもので又察覺などは夢にも知らず或は昇進を圖々されるのではな、女と密かに喜ぶ始末であつた。所が意外、嚴しい糾弾に顔色は青ざめ心臓の鼓動はとどまな。判決に至つては西光法師は平家の挙動を憎まはれたので最も罪が重く即坐に首を刎らるゝ殺された。法師は藤原氏の出でその長子師高は備前の回司になつた人であ

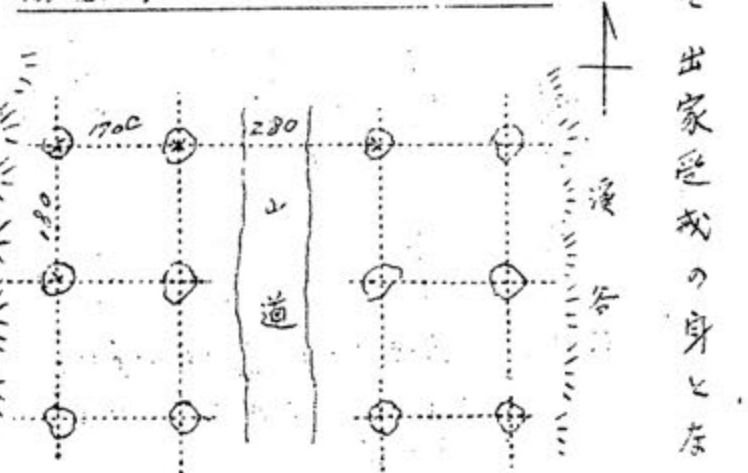
る。次子を師経といひ備前に流されたい。

俊寛と平康頼は成親の長子成経とともに死一等を減せられて三人揃つて西南の孤島、鬼界ヶ島へ流謫の身となつた。成経は藤ヶ谷の集りには列席はしていな、女と取調の結果陰謀に預つたという嫌疑によるものである。その他注意人物と目せられる太政大臣藤原師長以下三十九人の官職を解いてこれ、處分された。関白藤原基房は太宰権帥に貶れて備前に流罪した。この遺蹟は岡山市高島の湯迫の山中にある。又後白河法皇を鳥羽殿に幽閉し奉つて監視のもとに一切の出入を禁止して院政を止め、藤原氏の勢力を根こそぎ覆し悉く政權を平氏一族の手に握つた。後々に詳しく述べるが成親もこの事件に連坐して清盛の子の重盛の助命運動で死を免れ、備前の鬼島へ流されたのである。

八坂本によると、彌の浦という所の浅まレゲなる柴の庵に置き奉る。是れ此の賤が住むなる埴生の小屋も此れなるらん、島の習い後は山、前は磯なれば岸う波の音、松吹く風あはれいづれも盡きざりけり。とあり、公卿補佐天養元年七歳の條に「治承元年六月備前鬼島に配流せられしも其地海舶往來繁く悪かるべしとて、吉備の中山白來寺(一本に高懸寺とあり)に遷され云々」とあり、此れが備前、備中のや、かひにある吉備の中山の有木の別所という所である。高懸寺はいつ時代に發絶したものと知るべき資料はないが、今やう七百八十餘年に遡る平家専横時代にさむに史上にあらわれ、その創建は奈良朝期か平安朝期かと思はれる。寺名はこれ推察すれば韓民族の帰化人かこの里に土着し創設した我が邦最古の佛刹と考へられる。淺谷の山道を狭んで西側に割石の礎石が六個宛然と遺つてゐる。これは高懸寺址の仁王門の趾という。もとより寺運の盛衰と物語ることは出来な、二の有木の別所は古く佛蹟地であつたらうと想像せられる。成親は彌の浦(この地は今の上野市に田井浦という所があり、又鬼島市下津井に田井浦という所があり、これか判明したい) 今や吉備の中山に護送の途次、心せられ備中の安養寺の

(名教市深原にあった寺)僧調御房に請ふて朝原寺にて出家。出家後、其の身となり給ふた。一、深原は四管主村の深谷地帯で奈良朝時代には浅原山七十有寺坊といわれ、伴隨地では敏達天皇時代には百坊が有る。寺運隆盛を誇ったが、南北朝時代の乱をのため、延元年間東上する足利直義の七軍とこれと逢うんとする官軍方の新田義貞の軍勢と福山城に合戦した際、兵火に罹りて悉く建物は灰燼となり、僅かに安養寺「回宝見沙門天の尊像數十体」を保存し、又最近背後の山中から瓦経教百枚が出土したことは可断し、ことごとく、かにも由緒ある古刹と想像される。のみ一寺法燈を継いでいる。

レ、今レ成親公の朝原寺より有木の別所まで追立使者に護られ、出た道程は古大書に明かでないが、当時南面は生坂、三田、ニ子あたりは未だ拓けず居らば、七ノ池の峠を北へ跋え、宿に出で、回分寺を拝し、官道を東へ千足、矢部を経て、足宗川を渡り、吉備津宮を伏し、拝み有木の僧坊に幽閑の身となられたと察せられた。これも前生の約束と諦め給ひ、いつ失はれるとも知らず朝夕念佛に専ら、結ひ念佛三昧に過ごされ、いたが、その年の七月九日、酒に毒をまけて飲されたが、叶はず、文余の断崖なる谷底へ突き落され、毒殺せられたのである。



礎石の配置によつて測定すると山門は六ニ〇程に、三六〇程の建造物であつたことと想像せられる。

王家物語の「節成親御配流の條に」
 「備前備中西國の境、庭瀬の御吉備の中山といふ處に遷され、妹尾太郎兼家に預けられ、同年八月十九日清盛に兼家に令して有木の別所に終ひ奉る。最後の條に「有様やう／＼に聞えたり。酒に毒を入れて参らせけり」。

ごも叶はざりければ、峯のニ丈許り有りける下に、ハレを植えて上より突き落し奉れば、ハレに貫かれ、失せ給ひぬ。無下にうたてき(甚だレ)事ども也例少うも覺えける。大叙言北方はこの代に無き人と聞き給ひて、如何にもして今一度替えざる姿を見えんとこそ、今日追様をも羨へざりつれ、今は何に々せんとして菩提院と云ふ寺に御座して、様を羨へ形の如く佛事営み後世をぞ弔ひける。この北方と申すは山城守敦方の娘なり。賜られたる美人にて御寵愛の人にて賜はられたりけるとぞ」。

王家物語は源平盛衰記と同じく同年代の作の軍記物語である。作者は藤原行隆の子で浄土宗の開祖法然上人の弟の信空の兄に當る信濃前司行長の作といわれている。琵琶法師などによつて語られなく古間に知られてゐる平家文書の代表作である。おぼろげな平家の運落から源義仲、義経等のあわれな末路をこまかく叙述した佛教的無常觀を基として描いた和漢混淆の文である。目録に「祇園精舎の鐘の音、諸行無常の響あり、沙羅雙樹の花の色、盛者必滅のこゝろありとありわす。おぼろげ人も久しからず、ただ春の夜の夢のごとし。猛き者もつにはほろびぬ。ひとへに風の前のちりにおなじ」。の書き出しはあまりにも有名で後世までも一般に愛讀せられ人生の感覺に大きな影響を與へてゐるのである。

前書のように庭瀬御吉備の中山とあるので、往時は庭瀬御に属して、たもの女、この地は平家の部將妹尾太郎兼家の所領地に於て警固した追立使者は備前吉備津宮の社人の出である。雄波次郎経遠と僧の智明という法印である。送殺したハレとは又兼家に於て西岐の鉄に長い柄をつけた武器の一種である。これを上に向けて谷底に列べたのである。智明は成親卿の死後その怨霊の祟りを恐れ、高梁寺のほとりに一小祠を建てて祭つた。今に智明の若宮と傳へてゐる。

繁衍したのである。これは雄波次郎経遠の後裔が繁衍したのである。鬼界島に流された僧の俊寛、康頼、成経等は憂き日を送つて、いたが清盛の娘徳子が高倉天皇の中宮(皇后)になり始めて男子御出産(安徳天皇)

なされたので清盛は特赦を行ひ鬼界島の康頼と成経の二人は罪をかかれ
て俊寛を遣はして都へ帰ることになつた。駿河内海をばる航行の途中、
有本の配所に父成親の安否を尋ねたが、既になきあとであつたのでその
雲を怨に甲以流を女らに京都へ帰つたといふ。
朽ちたはてぬ 其名ばかりは有本にて 身ははななくも成親の卿
の歌を詠じた。成親父あえなく失はれこゝろ百二十九年を経た嘉元三年
五月廿五日・観進上人是性という坊さん女、甲ふ人もない荒れ果てた
の遺蹟を問ふに失養のため十三童の多層石塔を建てたが、明治の末
期に朽壞したのを福田海多田某という人女その傍に新しく墓標をつく
つてこの古い石塔を岡山市下田町の板山岩三郎に譲り承くその庭園に保
存してゐたが、其の後相摸の大磯にある安田善次郎の別邸に移したとい
ふ。いまどうなつてゐることか。

成親の法諡は 鶴林院殿正二位大納言成親親蓮大居士
とあり。福田海の境内に斯しく御霊屋を建てて位牌を安置し、常時祭祀
を怠らないと。

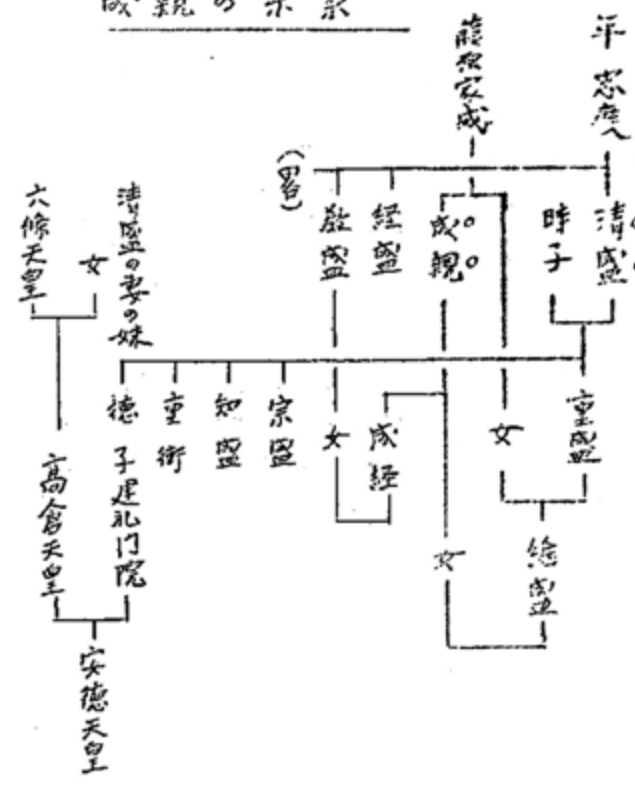
成親と清盛とは最も深い姻戚関係にあり、成親の子の成経の妻の父は
清盛の弟の教盛にして、又成親は清盛の嫡子重盛の妻の兄に当り、成親
の娘は重盛の子の進盛の妻になつてゐる。この深い縁組が結ばれてゐる
のである。又清盛は皇室としても親戚の同種である。清盛の妻の妹は六
條天皇の后妃にのぼり、清盛の娘の徳子は高倉天皇でありその間に生れ
たのが安徳天皇であることは前にも述べたが平家全滅の壇ノ浦の戦ひに
清盛の妻時子に抱かれ共には投身しなくなり、十年半生で海中から
東國の武士に救助せられたのは建礼門院と申す徳子である。

王家物語に建礼門院は平家滅亡後京都の長樂寺に入り阿性房を招いて刺
髪せられた。おん年二十九歳であつた。一時吉田山の新長谷寺に隠棲せ
られたが、まもなく一大原山の奥に寂光院と申す處に静かに候へ」と
側近にすすめられ一山里は物のさびれき事こそあるなれども、世の憂
よりは住よからんなるものさ」とここに移り晩年の暮れ、境涯と死に至
るまで住まひせ給ふたのである。

大覚大僧正 第五輯題目石碑墓参照
妹尾太郎兼房 第四輯戦争墓、第六輯河橋墓参照
日親上人 第三輯寺塔墓、口親堂参照

○ 崇西禪師 (一迭生の地)

禪師は臨濟宗の開祖にして俗姓は賀陽氏。累
永治元年(一一四二)吉備津宮の社家の生れ。系
幼くして竹千代丸といひ、八歳の時に始め
ては教の経典を繕き十一歳にして吉備郡
日直村(百福)の安養寺に入りて静心僧都の
教を受け、十四歳の時刻髪して僧となり
名を崇西と改め天台宗の本山比叡山近習
寺に上つた。崇西は身体が矮少であつたので同輩から輕侮せられたが生
來靈氣に満ちた人であつたからこれに刺戟せられて奮奮し台教を熱心に
修得した。静心僧都の訃に遇つて一時阿里に歸つたが、十九歳の時再び
比叡山に至り学匠有辨に就いて勸学し後ち伯耆の大仙に赴いて甚好禪師
に密教を師事した。仁安三年(一一三三)平清盛が太政大臣に就任した翌年、娘
の徳子が高倉天皇の后妃になつた女に法のため、当時中興は宋時代で



あるが天台山に至りては経論を求め半歳にして一度帰朝したが、文治三年(一一八六)の春に再び入宋して五台山の萬年寺に入り、虚菴禪師について五年間その奥義を究め、我國に帰つて宋の教えを直接傳へた。これが禪宗の一派の臨濟宗である。

臨濟宗はもと観迦の高弟といわれ、河葉(かせう)の始めた一派で達磨大師の支那に傳へて以来、蘇多の宗派にわかれた。宋西の学んだのはその内の臨濟宗で九州の北部地方に留まつて法燈を輝かし次第に全國に鼓吹せんことを志し、建久五年(一一三三)に京都へのぼつた。当時平家は滅び源朝を鎌倉に幕府を置いた時代である。宋西の修養時代は天下源平の二派にわかれ武家が政權を争ふ相刻の在であつた。奈良或は比叡山などの旧宗教派などの嫉視に遇ひ幾度となく困難に直面した。宋西禪護國誨や出家大綱などの佛書を著し進んで鎌倉に赴いたのは將軍頼朝が死去した正治元年(一一九一)で五十九歳の秋である。時の將軍源頼朝家の庇護を受け、龜谷に壽福寺を創建した。これより南東武士の帰依するものが多く建仁二年(一一二二)には京都の鴨川のほとりに建仁寺を建てた。始めは各宗派との摩擦を避けて天台宗進賢寺の末寺とし、台密禪の道場とし、後ちに臨濟宗一派の本山にした。宋西禪師は七十五歳、建保三年(一一三三)の六月に建仁寺に示寂した。法燈國師、聖一國師の二高足はその弟子である。

当時の臨濟宗は平安朝時代に遡るもので執興してきた武家に対抗して政治的思想を介入し、寺院に僧兵を置いてこれに當り何事も起れば御澳を率ひて朝廷に迫りその要求を貫徹するなどの行動をとつた。これが山法師といふのであつた。庶民は信仰のよきところを失ひ宋法時代となり、新らしい宗教が芽生えてきたのである。この臨濟宗は他宗派による他力本願と違ひ自力本願を旨とし、如何なる人でも坐禪を組んでよく考へ自己の

力によつて悟りを開くことが出来る。と説いたので興隆し始めてきた。武士は自己の實力によつて地位を得んとするその氣質と一致して、いふので非常な勢いになり、武士の間に信仰を得、武家政治に終り封建社会が組織せられようになつて多くの諸大名の庇護を受けたのである。

北條氏によつて鎌倉の建長寺、円覚寺、足利氏によつて諸國の安國禪寺、京都の北條は相國寺、東福寺(松林宗應禪寺、本山)などの拡大な堂塔伽藍が建てられその發達は急速であつた。後には宋の五山にならうつて佛學を以つたので、學問奨励の基礎ともなつた。これが五山文學といわれ、元が弘通し、宋教は次第に衰微してきたのである。

現在人々の生活上欠くことの出来ない茶の製法は宋西が宗から帰朝の際に茶の種子とその製造の方法を我國に傳へたもので、その恩恵は成火といわなければならない。著書に喫茶養生記がある。余談ではあるが緑茶の飲み方などについて少し記してみよう。



最初茶葉を乾燥して粉末にし、これを練り固めさうに乾燥して団子状として永く貯蔵する。これを飲む時に必要なだけほぐして煮出し、甘味や香味を加へ使用したものである。これは中國の唐時代(六三九-七五五)に流行したものである。我國でも平安朝の初期に製品として傳來した。茶葉用とか儀式に用いられたに過ぎなかつた。

これは遣唐使の藤原常房(八四一-八九一)が宋から持ちかへたものである。これは緑茶の粉末をそのまゝに湯を入れて茶碗でかき回して飲むもので、所謂抹茶の初まりである。これを茶道として完成したのが利休である。しかしこれは格式化されて貴族社会のみに限られ一般の庶民には流行せられなかつた。石川丈山(清山神社の宝物板倉重矩の鑑の製作者)が煎茶の方法をなめたのである。最もこの茶法は明の時代に文人の風流趣味として、ちてに行はれていゝたもので、これを我が國に傳へた蘭祖は宇治の黄檗山万福寺の蘭山隱元禪師で、隱元は明の歸化僧で宋朝の時に中國の煎茶の道具や方式をそのまゝ、日本へ持ちかへたのである。

煎茶は最初大衆向に愛好せられるようになった原因は禪僧の高遊外亮茶翁である。この僧は臨濟宗の僧にして十二

の時禪寺に入り後を京福山万福寺に移り青年時代の数年修業中に茶樹の栽培と製茶法を習得し肥前へ帰り一寺を持つたが法隆に譲りて自ら京都へつぼり茶を売って生活したので売茶翁と呼ぶのである。これは茶の葉を売るのでなく茶道具一式をツツラにこれこぞに保ちて茶の空手や名所回踏の地へ出かけて路傍に店を開き客の求めに応じて茶をすすめたのである。東福寺の紅葉、三十三間堂の音階高台寺の秋、嵐山の福山人出の多い季節を逢いば舞臺と店を移して茶を売り歩いた。石門は半僧半俗の風流人で又奇人でもあった。「茶錢は黄金でも半文錢でもよい。又は錢をくれずれた飲むも勝手、レタレたはたよりはまけられぬ」といふ言葉を懸けていた。こうした清風高雅の一生を送り八十九才で往したのである。

誰れでも簡単に言はれるこの茶道は江戸時代以後喫茶の風が盛んになり従って茶樹の増殖も全国に拡まり華産茶も栄へ、安政五年(一八五九)の横浜開港に伴って、これはやがて我國の緑茶は始めてアメリカに輸出するようになった。あの滋味の本体であるタンニンは放射性のストロンチウム90を解毒する作用があると言揚せられ、又ソ連の学者によるとタンニン成分の一つであるエピカテキンは毛細血管の抵抗力を増して器管や組織のビタミンC含量を高めるといわれている。

△禪は前述のように印度から中国へそして我國に傳わり、修行は自己を確立し人間の形成と文化の創造に寄與してきたのである。これは鎌倉時代以後の日本精神の根幹を培ったのである。それが現代の物質文明によつて追ひまわらぬ人間として、その主体性を喪失した。その原因は極端な資本主義にもよるが、禪を形式化した禪僧にも責任がみられる。戒律の厳しい客の禪堂に密々にランジスタトを持込み黒衣きまとつて酒とあふり女にふざけるなど(朝日新聞)時の流れとは云ふものの背徳的行為は禪道を自滅に導くものといふはなげればならない。

○僧麓山(松林寺住職)
麓山(ごうざん)は本姓は森本氏にして元禄の初年、まの大阪の地に生れた。字を何道といふは晩年になつて女らの号である。幼少の頃井山の宝福寺に入

り遷堂慧老和尚の弟子となり享保十二年の頃に庭瀬の松林寺の住職になつた。松林寺は元禄十二年に庭瀬藩主板倉鋤中守重高が崇坂(左村)にあつた定林寺を再興した禪宗の寺院である。宝永四年十月四日の大地震に崩壊し永く復旧をみなかつたが二代藩主板倉昌信が麓山禪師をして再興せしめたのである。故に当山の十世であり中興の祖としてゐる。麓山は茶道を嗜み雲舟派の望月玉蟾に就いて教えを受けその描く處は筆力勇健でその気風はよく僧の奇骨をあらわしている。北窓瑛談に「雪溪麓山玉蟾の徒は吾和の間を畫くものなり。其後宋紫石云々」と載せてゐる。所謂明清派の画を描いてゐた。三代藩主勝興の世に意見を異にし、寛延年間法燈を弟子の月枝義琳和尚に譲り瓢箪松林寺を去つて一時東福寺に身を寄せたが後清水寺のほとりに何適堂の草坊を営んで俗書を遠ざけ筆硯を交して宝曆九年正月廿一日七十歳で示寂した。遺作として松林寺に自作の肖像画、当山閑室赤松次郎左衛門助村の画像墨梅圖などが保存せられてゐる。へおわり、この項未完

身出川挾町備吉
中国信販加盟店
計量・金物・左官・材料等の御用命は
お馴染みの「モーサン」で

アタタ時計店

岡山柳川電停前・TEL 2098

吉備建材有限会社

(代表社員 平松哲男)

吉備町庭瀬国道筋 電話(吉備局)二三七